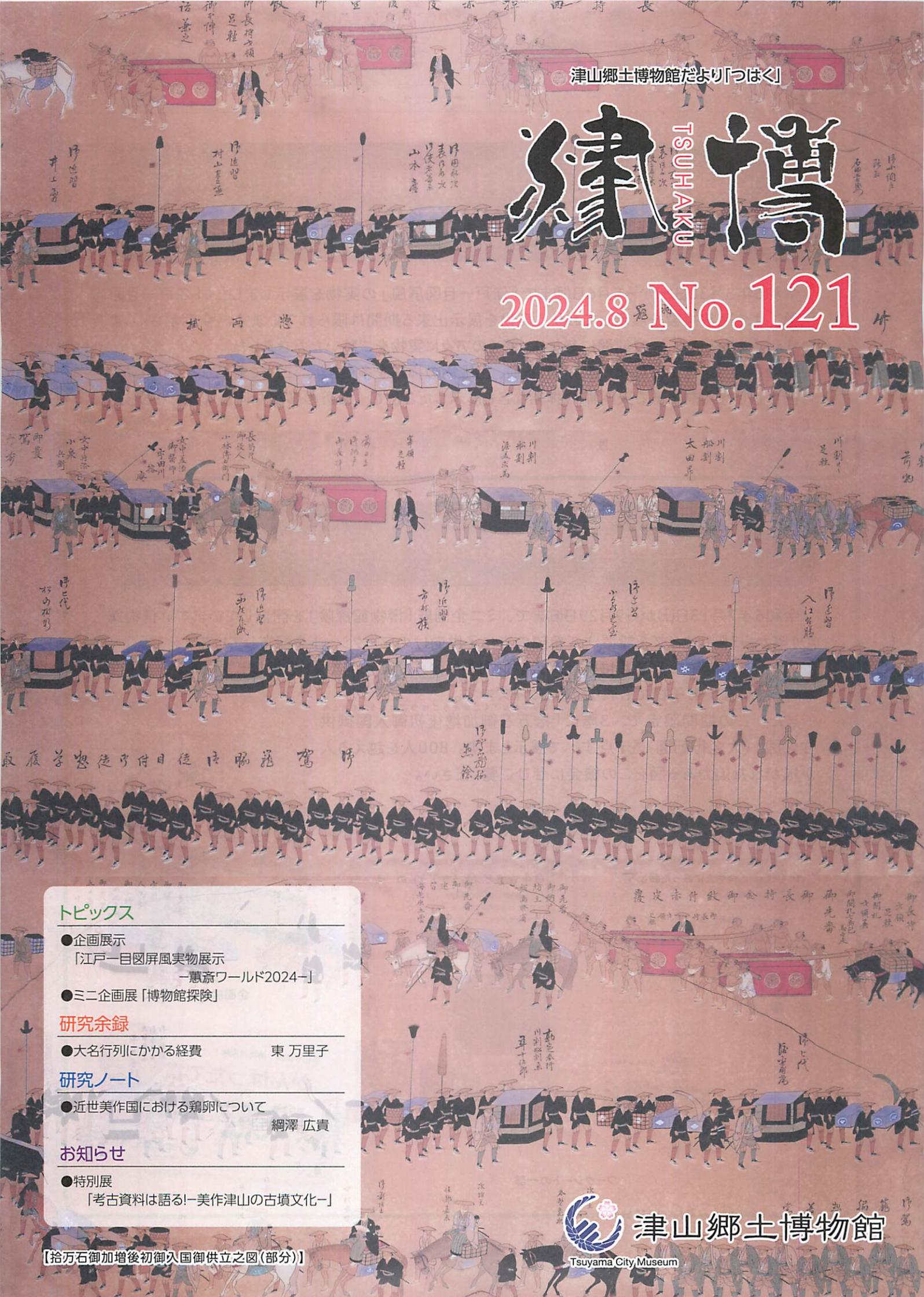


津山郷土博物館だより「つはく」

# 津博

TSUHAKU

2024.8 No.121



## トピックス

- 企画展示  
「江戸一目図屏風実物展示  
—蕙齋ワールド2024—」
- ミニ企画展「博物館探検」

## 研究余録

- 大名行列にかかる経費 東 万里子

## 研究ノート

- 近世美作国における鶏卵について 網澤 広貴

## お知らせ

- 特別展  
「考古資料は語る!—美作津山の古墳文化—」



津山郷土博物館

Tsuyama City Museum

## 企画展示「江戸一目図屏風実物展示 —蕙斎ワールド2024—」を開催しました。

令和6年3月30日(土)から5月6日(月)まで「江戸一目図屏風」の実物を展示しました。「江戸一目図屏風」は、通常複製を展示しており、実物を展示出来る期間は限られています。会期がさくらまつり・ゴールデンウィーク期間にあたり、多くの方々に実物をご覧いただきました。

鋏形蕙斎は、津山藩に召し抱えられる前、出版物の挿絵を多く描き、江戸で著名な絵師でした。今回は召し抱え前である天明期の挿絵なども展示したことで、蕙斎の多様な画風を感じることができました。

## ミニ企画展「博物館探検」を開催中です。

令和6年7月13日(土)から9月29日(日)まで、ミニ企画展「博物館探検」を開催しています。博物館の1階から3階にクイズを設置。ご希望の方に子供向けのワークシートを配布しています。

スタンプで陶棺のパズルに挑戦、大名行列の中からお風呂や鷹などを探し出すなど、歴史をまだ習っていないお子様でも取り組めるクイズです。

また、この期間限定で、3階に「じゅうまんごくごかぞうごはつごにゆうこくおとも拾万石御加増後初御入国御供立だてのす之図」(大名行列図)を7点すべて展示します。800人を越える人が描かれた迫力ある図をこの機会にぜひご覧ください。



企画展のようす

**Q3 つやまにあったおしろ**  
いまから400ねんくらいまえ つやまには おおきなおしろが たてられました。そのおしろを ちいさくしたもけいのなかに つるわかがかかれています。さがしてみよう。



つるわか

ぼく つるわか!

つやまの おしろのたてものは こわしてしまつたから いまは もうありません。でも びっちゅうやぐら だけは もういちど たてられたよ。



びっちゅうやぐら

**Q4 えど(とうきょう)の え**  
いまから200ねんくらいまえの とうきょう の えです。このえのなかには たくさんの ひとが えがかれています。どんなひとがいるかな? もし このえのなかに はいったら、どのあたりへいってみたいかな?



3かいの ばそんでしゃしん を おおきく できるよ!



ワークシートの一部

令和6年度 博物館探検!  
**がんばったで賞**  
あなたは 博物館探検で クイズに挑戦されました  
その努力をたたえ ここに賞します  
令和6年 夏  
津山郷土博物館  
Tsuwano City Museum

# 大名行列にかかる経費

今号の表紙は「拾万石御加増後初御入こくおともだてのず国御供立之図」を使用しました。この図は、津山藩が5万石から10万石へ復帰してはじめて藩主が帰国した文政元年（1818）の行列の様子を描いたもので、現在開催中の「博物館探険」で展示しています。「博物館探険」にご参加くださる方々は、800人を超える人々が描かれた図をじっくり観察し、お風呂や熊毛槍、鷹などを探すクイズに挑戦しています。

さて、このような大人数の行列にはどのくらいの経費が必要だったのでしょうか。津山藩の財政を担当していた勘定奉行の日記に、必要な経費についての記載があります。寛保3年（1743）3月、藩主が江戸へ出発するにあたり、金2035両および銀3貫346匁9分2厘が必要と計算されました（山本博文監修『江戸の銭勘定』は一両を約18万円と試算）。その内訳が下記の表です。なかでも、何かあったときのための「用心金」が500両も準備されていることに驚きます。津山藩の参勤交代は、およそ736km、片道16泊17日、橋が架かっていない大井川の川留によって20日以上かかる場合も

ありました。「用心金」は、大井川の川留や天候などにより旅程が伸びる可能性が多いにあったために準備されたと考えられます。

そして、藩主が無事江戸に到着した後、同年5月16日の日記には、支払った金額が記載されています。実際には用意したお金をすべて使いきることはなく、金618両2歩、銀237匁5分4厘5毛、銭484文が残りました。このとき、藩主は3月18日に津山を出発、17日後の4月6日に江戸に到着しており（この年の3月は29日まで）、およそ予定通りの日程であったことから、「用心金」などは使用しなかったのでしょうか。

寛保3年当時、津山藩は5万石だったので、表紙の「拾万石御加増後初御入国御供立之図」より質素な行列だったはずで、10万石になったのち、天保11年（1840）1月23日の「勘定奉行日記」に、「御帰城の節、御道中金ならびに御用意金しめて二千五百両」という記述があります。この年に藩主が津山へ帰国する予定であったため、事前に2500両の用意を計画していることがわかります。

財政難であった津山藩は、この莫大な経費を苦心して用意しました。勘定奉行日記からは、財政担当者の苦勞が読み取れます。

東万里子

## 金2035両と銀3貫346匁9分2厘

### 〈内訳〉

- ・金130両…関札・継馬
- ・金22両…先荷
- ・金430両2歩と銀724匁9分2厘…御供の面々道中雑用・馬銀
- ・金500両…用心金
- ・金952両2歩と銀2貫622匁…道中本陣へくだされ金・

尾張屋日雇い銀・馬飼料他  
〔「勘定奉行日記」寛保3年3月16日条〕

# 近世美作国における鶏卵けいらんについて

綱澤 広貴

## はじめに

日本において一般に鶏卵<sup>①</sup>食が広まったのは、江戸時代(近世)中期と言われる。それ以前にも鶏卵を食す文化はあったが、仏教の影響により、肉食とともに忌避する風潮があった。江戸時代には、「卵百珍」(天明5年出版)を代表的な例として、鶏卵に関する様々な、いわゆるレシピ本が出版されており、鶏卵を食す文化が世間一般に浸透していったことがうかがえる<sup>②</sup>。ただし、江戸時代の保存技術は未成熟であるため、鶏卵は非常に高価で、贈答品としても取り扱われた<sup>③</sup>。

本稿では、こうした鶏卵食の展開を踏まえ、現在、岡山県北地域の名産品として注目されている鶏卵について、江戸時代の様子を津山藩を中心に検討する。

## 鶏卵の移出

美作国の鶏卵はもちろん国元でも消費されたが<sup>④</sup>、近世中期頃より吉井川を通じて他国へ移出されていた。そのことが史料に登場するのは、延享2年(1745)2月3日のことである<sup>⑤</sup>。「勘定奉行日記」によると運上方村瀬八兵衛から申し入れがあり、「玉子川下ヶ運上之儀是迄無之候処、近來鶏卵余程川下有之由(中略)今般玉子川下ヶ運上附可然」と述べられている。つ

まり、近年は鶏卵がずいぶん津山から吉井川を通じて川下げされているので、運上をとるべきだ、という意見である。そして意見中では、津山で運上を取らなければ下流の「木知ヶ原御番所」で取られるようになり、そうなれば城下の者の損失になるとも述べている。

この木知ヶ原(現美咲町吉ヶ原)の番所は、美作国一國が津山藩領であった近世前期には津山藩の船番所であり、松平氏の津山入封以後は幕府領となり、このときには幕府の船番所であった。この前年の延享元年には幕府代官から一部の船荷物について、津山に加えて木知ヶ原船番所でも運上銀を取ることが通達されていた。津山商人の交渉により、二重の運上を徴収されることは避けられたが、津山で対象となっていない22品目について、新たに木知ヶ原船番所で運上銀が課せられた<sup>⑥</sup>。鶏卵はそれらの品目に該当していなかったため、右のように、藩内において延享2年に運上の対象とするよう議論されたのである。

その結果、延享2年2月6日に船一艘を150箱積み、一艘につき運上銀15匁、一箱につき一分と定められた<sup>⑦</sup>。この箱については「箱ハ半櫃ニ少大振ニ大略玉子七百入之積」とある<sup>⑧</sup>。「半櫃」とは長持の俗称であ

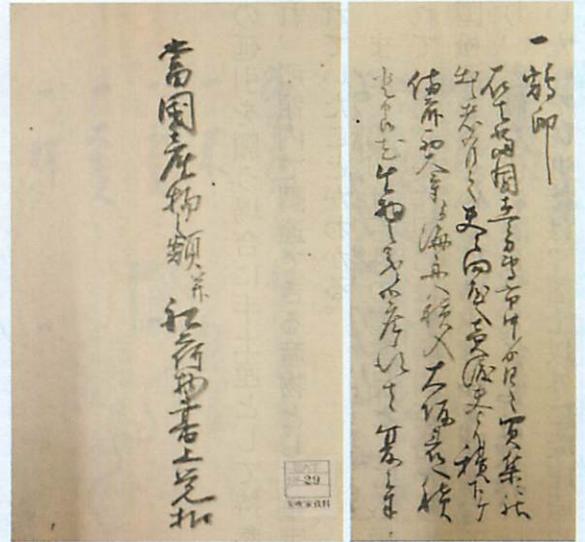
る長櫃の半分程度の大きさを想定していると思われ、長さ90センチ、幅・高さ50センチ程度であろう<sup>⑨</sup>。鶏卵の箱はこれより少し大振りで、一箱には概ね700個の鶏卵が入ったことから、船一艘で最大10万個を越える鶏卵が川下げされていたことになる。

その後、藩は宝暦9年(1759)4月に紅座や醤油座など8座の停止を仰せ付け、同年5月29日、鶏卵を含む11種の品目に運上銀を課すことを改めて仰せ付けている。前述の通り、鶏卵には延享2年に既に運上銀が設定されていた。このときの藩の意図は、11種の品目は、特定の商人による販売の独占が起こっており、座の停止とともに、自由取引を促進するところにあった。鶏卵の取引もこのとき特定の商人に独占されるようになっていたと考えられる<sup>⑩</sup>。しかし、宝暦11年に宝暦改革の終焉とともに、この政策は旧制に復されたため、この時期を除いて、鶏卵は特定の商人による取引の独占が行われたと考えられる。実際に「請込人」に東新町豊野屋七左衛門が仰せ付けられ、一箱につき「判賃」35文を払う決まりがあった<sup>⑪</sup>。

## 生卵のまま大坂表へ

鶏卵を川下げするルートや調達方法、状態などについては、「当国産物之類」船荷物

書上覚控」に詳細な説明がある。【写真】はその表紙と鶏卵について記した部分である。当史料は、農業用水を確保するために吉井川の水を堰留めた下流の押漕村百姓に対して、堰の撤廃を訴えた津山城下の船惣代達が作成したものである<sup>⑧</sup>。そのなかで鶏卵については、「当国在方、専市中右日々買集<sup>ニ</sup>罷出候者有<sup>レ</sup>之、夫々問屋へ売渡」すものであるとする。つまりは、主に津山城下の者のなかに日々村々へ買い集めに出ているものがおり、その者らが問屋へ売り渡しているという。ここでいう「当国在方」は、津山藩領に限定された範囲ではなく、鶏卵は所領を越え、美作国の各所から集められたものと思われる。そして、問屋に集められた鶏卵は、津山から備前国西大寺まで積み下げられ、そこから海船に乗せ替えて大坂表に運ばれた。



【写真】「当国産物之類、船荷物書上覚控」

そのなかで注目されるのは、夏期とそれ以外ではルートが異なったことである。史料には「尤生物之義<sup>ニ</sup>御座候得者、夏氣別道中差急<sup>ニ</sup>ぐ、とある。「生物(ナマモノ)」とあることから、美作国の村々から集められた多量の鶏卵は加工されず、生卵のまま大坂表に送られたことが分かる。そのため、夏期には特別に輸送を急ぐ必要があった。ルートとしては、西大寺港まで出ず、備前国片上から積み出すもので、片上までは「当川筋備前天世(瀬)と申所<sup>ニ</sup>水上仕、牛馬人足<sup>ニ</sup>片上江送越」とあり、次頁の【図】の通り、和気郡天瀬村で水揚げし、牛や馬を用いて陸路で片上村まで運び、大坂表へ海路で積み出すというものであった。これにより、瀬戸内海に突き出た邑久郡を迂回して積み出す必要がなくなり、最短で大坂表へ輸送することができた。

ただし、【図】のように、片上村から最も近いのは吉井川が金剛川と合流して西に曲がる地点である。鶏卵を川船から乗り換える天瀬村はそこからやや北側に位置し、陸送する距離が長くなってしまふ。これは、天瀬村の南側には和気村があり、そこには岡山藩の和気船番所が置かれていたためと考えられる。船番所では荷改と運上銀の取立が行われ、和気で改められた書付が西大寺へ送られ、チェックされる仕組みになっていた<sup>⑨</sup>。鶏卵に岡山藩が運上を設定していたのかは分からないが、敢えて天瀬村で積み替えた事実からは、和気船番所を避ける意図が読み取れる。

津山藩における鶏卵

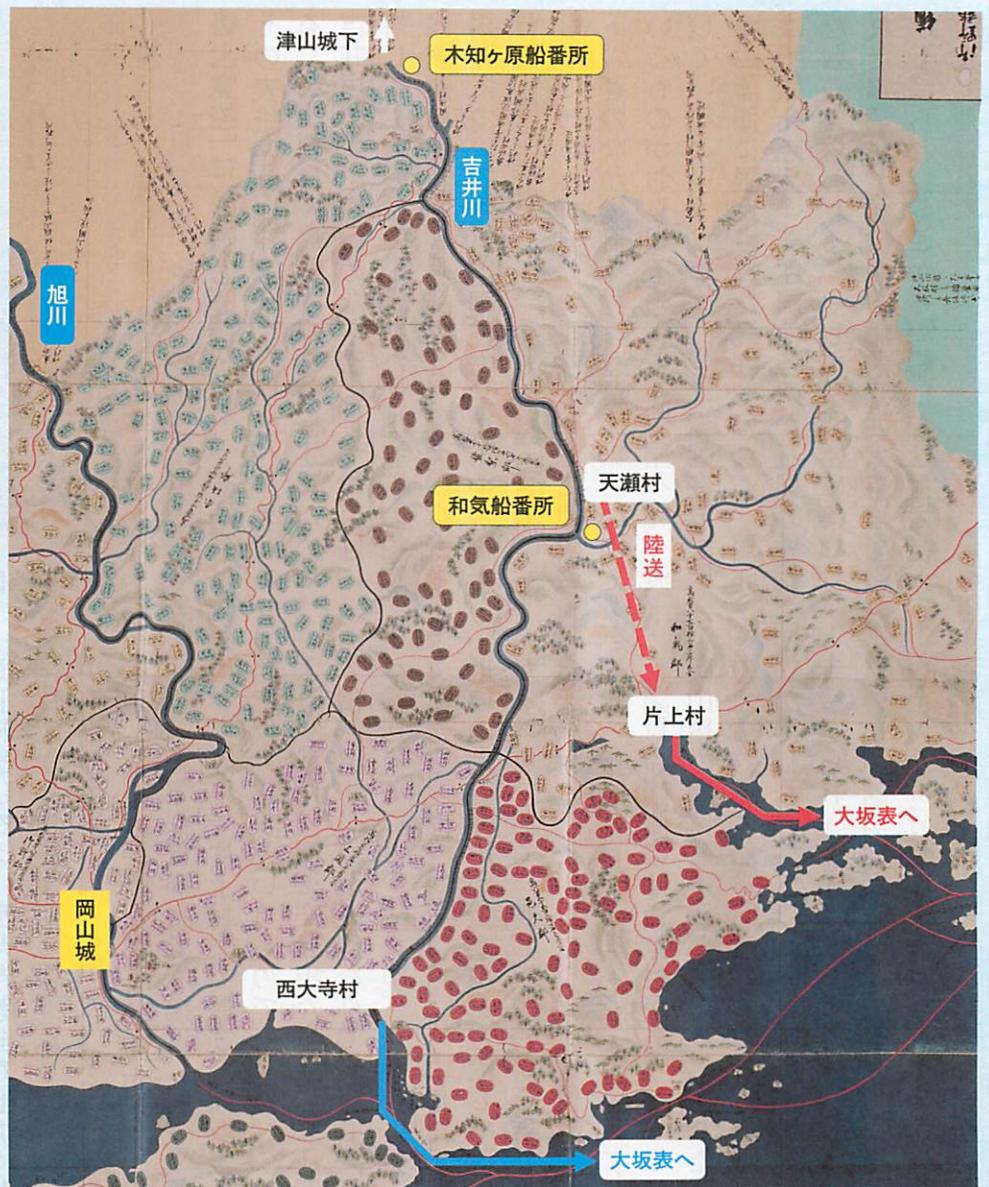
では、津山藩にとって鶏卵はどのような存在であったのか。江戸時代の名産・特産品を確認する際、よく活用されるのが、大名が四季それぞれに産物を將軍に献上する時献上である。津山藩の場合、一般的な鯛や海鼠の他に、綿や銀杏、蕨、鮎、塩引鮭などを献上している<sup>⑩</sup>。しかし、鶏卵が將軍に献上された事実は確認できない。

また、明治2年(1869)、明治新政府は大名家に対して支配地の石高や物成高、藩士や領民の人数などを調査して報告するように求めた。津山藩でもその報告書が作成され、「国産」について【表】の通り報告されている。しかし、鶏卵は産物として報告されていない。

とはいえ、鶏卵は藩内で重要な位置にある産物だった。例えば、延享元年(1744)9月10日には、藩から大坂銀主への手土産として持参されている<sup>⑪</sup>。登坂する勘定奉行が持参した銀主への書状には「御調達筋返済方之義」について「今年之儀も外<sup>ニ</sup>取計方も無之、気毒之至御座候処、御難儀所御了簡頼入存候」とある<sup>⑫</sup>。借銀の返済ができず、許しを請う内容である。この年の津山藩では、儉約令が出されていたが、鶏卵は例年通り、鯉節とともに手土産として調えられている。このうち、鯉節は大坂で購入されたのに対し、鶏卵は国元で調達されている。鶏卵が儉約令下において、借銀返済

の延引を願う場合に手土産として持参され、所領内で調達できる産物として重宝されていたことがわかる。

また、鶏卵は百姓の贈答品としても扱われていた。美作国には播磨国姫路から出雲国松江を繋ぐいわゆる出雲往来が通っており、参勤交代に際して大名行列が往来していた。その迎接は、藩士以外に大庄屋や大



【図】鶏卵の輸送ルート(天保6年「備前国絵図」より作成、国立公文書館デジタルデータを加工)

年寄などの村方・町方の役人が担当した。文化5年(1808)3月4日に松江藩の支藩である広瀬藩の行列が津山を通行した。そのとき迎接に当たった河辺村大庄屋の土居辰五郎の日記には、金一両を拝領した際に、「玉子」を献上したことで、個別に金百疋を拝領したと記されている。百姓から武士への身分を越えた贈答品としても

鶏卵が重宝されていた。

もちろん、こうした鶏卵の扱われ方は、近世における鶏卵が高級品であったことが前提であるが、「表」において示した通り、津山藩には他にも複数の産物があった。そのなかで手土産や贈答品として選択されたことは、鶏卵が領内の産物のなかで先方に喜ばれるものとして認識されていたことを示している。近世における武家の贈答品や献上品としては鯛や鮑などが多く用いられた。しかし、これらは他国から取り寄せたり都市で調達する必要がある、当然多くの金銭がかかる。鶏卵は海のない美作国において国元で調達できる重要な産物であっ

品目	1ヶ年分	備考
●国産		
釘	18万把	
鎌	30万枚	
土焼物	20釜焼立	
木附子	5千斤	
繰綿	5千本	1本につき目方6貫200目
雲斎(織)	7千反	
稲扱	180丸	1丸12艇
茶	3千斤	上品下品取合
足袋	15万足	
木履類	40万足	
鍋釜	100丸	
板類	1千間	
角木	1千本	
丸太	500本	

【表】明治2年津山藩産物調(出展：愛山文庫G1-5)

た。  
おわりに

以上、美作国における鶏卵について若干の考察を行った。ただし、鶏卵は重要な産物ではあるが、美作国を代表する名産品とは言い難い。その背景には、鶏卵自体が他国でも広く生産されたこと、保存が利かず流通が難しかったことが想定できる。しかし、津山城下に集められた鶏卵は生卵のまま大坂表まで運ばれ、都市で流通した。大坂の周辺にも農村は広がり、畿内近国の鶏卵が大河川を通じて大坂市中に流通したはずである。内陸の津山から移出するには、輸送費・手間賃が嵩み、そのことは鶏卵の価格にも影響する。そのなかで、わざわざ大坂表に運んだ背景には、都市での鶏卵需要の高まりとともに、美作国における鶏卵の品質の問題が想定可能であると考えられるが、その具体的検討は今後の課題としたい。

## 註

- ①用語としての玉子と卵については、同一史料中と同じものを指して使用される場合があるため、特に使い分けはされていないものと考えられる。本稿においては、史料の説明部分では史料中の表記に従い、それ以外の箇所では鶏卵を使用する。
- ②松本仲子「江戸時代の料理本にみるたま

ご料理について」(芳賀登他編『全集 日本食文化 第4巻』、雄山閣出版、1997年)。

③山本博文『江戸の銭勘定』(洋泉社、2017年)によれば、江戸では鶏卵ひとつ20文(現在の価値で600円程度)で流通していた。

④庶民だけでなく藩士に食されていたことも確認できる。寛政期と慶應元年の献立を記した「会席献立覚」(愛山文庫N-3)には、鶏卵は「寄鶏卵」や「鶏卵焼」、「玉子卸大根」、吸物の具として「玉子白身」が確認できる。

⑤「勘定奉行日記」延享2年2月3日条。

⑥「津山市史 近世Ⅱ」134頁。

⑦「勘定奉行日記」延享2年2月6日条。

⑧「市中諸運上物掟書」(「玉置家文書」755)、その他の船荷物と運上銀高は『津山市史 近世Ⅱ』132頁に詳しい。

⑨工藤員功編『絵引民具の事典』(河出書房、2008年)のうち「長持」の項目を参考にした。

⑩『津山市史 近世Ⅱ』224頁～226頁。

⑪前掲註⑧。

⑫矢吹家文書十二支箱文書314-129。

当史料は、争論を有利に進めるために、船惣代があらゆる荷物を書き上げており、海のない美作国で塩や魚介類の調達ルート、鳥取藩の荷物が吉井川を通っていた事実など様々な情報を提供してくれる貴重な史料である。

⑬吉井川堰留めに関する争論の顛末については、神尾齊「押淵村井堰留めによる船路論争について」(『博物館だより』No.8、1992年)。

⑭『日本歴史地名大系第34巻 岡山県の歴史』(平凡社、1988年)。

⑮鮎の調達は、東昇「近世後期津山藩の築をめぐる領主と領民」(『津山市史研究』1、2015年)に詳しい。

⑯海を持たない津山藩が旧所領越後高田との由緒から塩引鮎を献上していたことについては「津山の歴史あ・ら・か・る」と將軍への献上品津山藩がなぜ塩引鮎?」(『広報津山』2017年11月号)に詳しい。

⑰「寛政武鑑」寛政元年(1789)。

⑱寛政3年(1791)2月時点の津山藩の借金は、合計で金6558両・銀1573貫目余となっている。そのなかには利息のみを毎年返済している分と年賦返済の分があった(尾島治「津山松平藩の財政について」『博物館だより』No.15、1996年)。

⑲「勘定奉行日記」延享元年9月13日条。

⑳「御用日記」文化5年3月4日条、土居家文書178、津山郷土博物館蔵。



# 令和6年度 津山郷土博物館特別展 考古資料は語る！ —美作津山の古墳文化—

美作の古墳研究史は、市内日上にある明治6年に建てられた古冢碑までさかのぼり、碑文には開墾時に古墳から鏡（径五寸）などが出土したことが書かれています。美作国は備前国からわかれてあとからできました。この謎を解く鍵は前時代の古墳文化にあるのではないかと考えます。美作の中心であった津山には、美作最大や最古の前方後円墳をはじめ、陶棺といった独特の棺桶が普及するなど独自の文化圏を形成していたことが伺えます。貴重な考古資料から美作津山の古墳文化を紐解きます。

【会 期】令和6年10月12日(土)～12月15日(日)

【会 場】津山郷土博物館 3階 展示室

## 〈主な展示品〉

(○は岡山県指定重要文化財、◇は津山市指定重要文化財)

田邑丸山2号墳(土師器・鏡)

奥の前1号墳(円筒埴輪、土師器、鏡ほか)

柳谷古墳(○銀象嵌頭椎大刀柄頭、○同鞘尻金具、○須恵器)

殿田1号墳(◇銅鏡)、荒神西古墳(◇銅鏡)

## 〈記念講演会〉

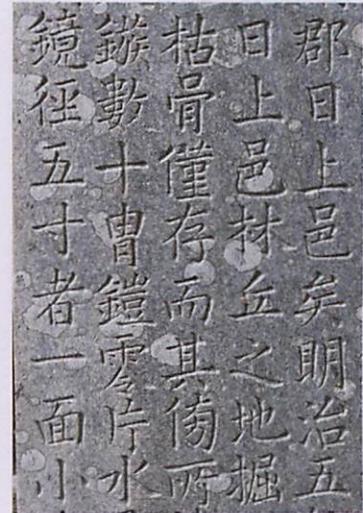
(終了後ギャラリートークを開催)

講師：くらしき作陽大学音楽学部教授 澤田秀実氏

演題：美作津山の古墳文化の特質

日時：令和6年11月16日(土) 13:30～15:00

会場：津山圏域雇用労働センター(山下92-1)



古冢碑部分



銀象嵌頭椎大刀柄頭



博物館だより「つはく」  
No.121 令和6年8月31日

津博  
TSUHAKU

【編集・発行】津山郷土博物館

〒708-0022 岡山県津山市山下92  
Tel (0868) 22-4567 Fax (0868) 23-9874  
E-mail tsu-haku@tvt.ne.jp

【印刷】 刷] 有限会社 弘文社

## 入館のご案内

【開館時間】午前9:00～午後5:00

【休館日】毎週月曜日・祝日の翌日

年末年始(12月29日～1月3日)・その他

【入館料】一般…300円(30人以上の団体の場合240円)

高校・大学生…200円(30人以上の団体の場合160円)

65歳以上…200円(30人以上の団体の場合160円)

中学生以下・障害者手帳を提示された方は入館料が無料です

